國學院大學學術情報リポジトリ

偽書『南淵書』と権藤成卿、そして朝鮮

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 雅稔, Yamasaki, Masatoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000400

偽書『南淵書』と権藤成卿、そして朝鮮

山崎雅稔

はじめに

一九二二年（大正一一）五月三日、権藤成卿・小澤打魚の校注になる『南淵書』三巻が公爵一条実輝より皇太子裕仁親王に献上された。このとき付された「南淵書ヲ進ムルノ表」（以下、上表文とする）によれば、この書は「古ノ碩儒南淵請安カ天智天皇ノ下問ニ奏対セシ所」を世に伝えるものであり、「久年湮没」して「知ル者極メテ希」になつていたものだという。南淵請安は推古天皇の時代に隋に遣わされたことで知られる人物であ

る。かりに請安が『南淵書』を書いたとすれば、それは八世紀前半に成立をみる『古事記』や『日本書紀』に先行する日本最古の文献資料となる。

事実、そのようなふれ込みで世間に公にされた書物であつたらしい。刊行当時の新聞には、「現在伝はつている我が古文書中の最古のものは『古事記』だと云はれている、所が其よりも更に百年ほど昔の著述が大正の今日初めて翻刻されたと云ふのはなんと云つても我が古文書界未曾有の驚嘆すべき記録であらねばならぬ」とか、「本書は隋唐に三十三年留学し、帰朝後天智天皇の御下問に奉答して帝王学を進講したる南淵請安の著で

(中略) 実に稀代の典籍と云はねばならぬ、斯くの如き千古の典籍が広く行はるゝに至つた事はわが史学の研究に一大光明を与へるもの²⁾であるといった紹介記事が掲載され、あるいは同年一〇月刊写真版『南淵書』の広告には「日本最古の書にして大化改新の原動力」という文句が躍っている³⁾。

ところが、学術的な見知から『南淵書』にそのような評価が与えられることはなかった。そればかりでなく、刊行から一〇年が過ぎた一九三三年(昭和八)、にわかに偽書説が浮上した。その真贋をめぐる歴史学・書誌学・漢文学の専門家による批判的検証が行われ、形式・内容の両面から偽書とされ、校注者による積極的な反論もなかったこともあって、いわくつきの文献として扱われるようになった。いま、この偽書説に疑義を唱えるつもりはない。『南淵書』は校注者の権藤成卿らによって作出された書物とみるべきであり、そこに南淵請安の思想も古代日本の歴史の実像も見出すことなどできない。このように了解したうえで、本稿では『南淵書』を取りまく問題に接近する。

本書の「成立」に深く関わった権藤成卿(一八六八—一九三七)は、昭和初期の社会思想に影響を与えた農本主義の理論家である。権藤は彼の死亡記事に「血盟団事件、五・一五事件に思想的影響を與へた蔭の人⁴⁾」とあるように、一九三二年

(昭和七)に発生した二つの連続テロ事件の主導者、井上日召や藤井斉、橘孝三郎らと交流した人物であり、彼自身も血盟団事件に関与した疑いで一時身柄を拘束されて話題になっている。『南淵書』の存在が注目されて、偽書とされたのはその翌年である。権藤の思想は、丸山真男によって日本ファシズムの一類型として取り上げられ、思想史研究において、その右翼的傾向や日本主義的傾向、「官治」すなわち官僚専制主義に対する批判的傾向が指摘されてきた。その生涯に関しては、滝沢誠の一連の研究がある。権藤は久留米藩主の侍講であつた父松門に家伝の「制度典例学」を学び、漢籍を渉獵して独自の学識を蓄積した。その後、一九〇二年(明治三五)に上京して内田良平が主宰する黒竜会に関係し、日韓合邦運動とも関わりを持ち、朝鮮への渡航歴もある。一九二〇年(大正九)にみずから自治学会を創設して、農本主義者としての活動を開始した。『南淵書』の献上・刊行は彼の後半生における思想活動の転換点に位置する。

河野有理の研究によれば⁵⁾、権藤の著作活動は歴史を通して自身の思想を表現しようとした点に一つの特徴がある。河野が取り上げているように、戸坂潤は「現在のアクチュアリーに向かつて古典を無批判に適用」する彼らの手法を「文献学主義」

として批判し、とりわけそれが「国史」に「無組織的」に適用されていること、しかも日本主義的「意識」に立脚して「国史」が叙述されていることに警鐘を鳴らした。⁸⁾戸坂の指摘は昭和初期のファシズムに固有の問題ではなく、歴史叙述の思想・方法の問題として考えなければならぬのだが、ここではそれを念頭におきつつ、『南淵書』がどのような由緒・内容を持つものとして登場し、またどのような問題を内包していたのかについて、先行研究に導かれながら基本的な整理・検討を行うことにし、近代における古代史のナラティブについて考える手がかりとしたい。⁹⁾

一、南淵請安と本書の由緒

まずは書名の由来にもなっている南淵請安について簡単にふれておきたい。¹⁰⁾請安に関する史料は少ない。『日本書紀』は六〇八年（推古十六）に学問僧として隋に渡ったのち、六四〇年（舒明十二）に帰国したこと、その後、中大兄皇子・中臣鎌足が請安のもとで「周孔之教」を学んだことを伝えるのみである。

すなわち、『日本書紀』巻二十一・推古天皇十六年（六〇八）

九月辛巳条によれば、「唐客」裴世清の帰国に際して派遣された小野妹子を大使、吉士雄成を小使、鞍作福利を通事とする遣隋使に随伴して、留学生の倭漢直福因・奈良訳語惠明・高向漢人玄理・新漢人大阨、学問僧の新漢人日文・南淵漢人請安・志賀漢人慧隱・新漢人広濟ら八人が入隋した。「漢人」と記されていることから、請安は渡来系氏族の出身であったとみられる。次いで、同卷二十三・舒明天皇十二年（六四〇）十月乙亥条には、大唐学問僧「清安」、学生高向漢人玄理が新羅經由で帰国したとある。請安は中国で三〇余年を過ごし、その間に隋唐の王朝交替を目の当たりにし、新羅の遣唐使の協力を得て出国、倭に帰国している。

また、同卷二十四・皇極天皇三年（六四四）正月乙亥朔条は、法興寺の打毬会で出会った中大兄皇子と中臣鎌足が、「南淵先生」のもとで周孔の教えを学び、その道すがら蘇我入鹿打倒の謀議を話し合っていたことを伝える。この逸話は翌年の蘇我氏本宗家滅亡事件（乙巳の変）の前史をなす。ただちに史実とみなすことはできないが、ともかくここに請安の名前が登場する。だがその後の記事には請安のことは見えず、没年なども分かっていない。

謎の多い南淵請安の人物像について、権藤成卿も詳しく論じ

ているわけではない。例えば、『君民共治論』第四章第一節「南淵先生」で次のように言及している程度である。¹⁾

南淵先生のごとは、正史の表面には中大兄皇子、中臣鎌子を従へさせられ、南淵先生の所に至り、周孔の教を学ばんと請はせられた一節が見えて居る丈である。併し後世学者間に於て古文献を涉獵し林道春、具原益軒等の時代に至り先生を王仁の次に置く様になつた。人名辞書に簡単に推古朝隋に遊び経術を以て稱せられ書百卷を著はせり、其書今伝はずとあるのは、道春の考索を採録したものであらう。意ふに近江朝倒覆の後当時の事蹟が頻りに抹殺されたことは疑うべくもないことであつて天智天皇の御遺著百卷余も東寺に其目錄を留めてある斗り一冊も伝はつて居らぬ。南淵先生の事歴遺著の焚滅に帰したのも此の時代に於ける心なき官僚のなしたこと、考えらるゝ。

これによれば、『論語』や『千字文』を倭国に伝えたと言はれる王仁や請安の存在が歴史的に評価されたのは、江戸時代の儒学の伝統においてであった。林道春(羅山)以後、請安が遺したと考えられてきた数多の著作について、六七二年の「近江朝

倒覆」(壬申の乱)の後、「心なき官僚」の手によつて滅却されたと想像を巡らしているが、ここに確たる根拠があるわけではない。

さて、近代における『南淵書』の価値は、「南淵請安カ天智天皇ノ下問ニ奏対セシ所」(上表文)を伝える文献であるという点に尽きる。

本書が献上されたのは、裕仁親王が摂政になつた翌年である。この年の二月、裕仁は東宮御学問所を卒業し、三月から半年あまりの予定でヨーロッパ外遊のために日本を離れている。横浜港で戦艦香取に乗艦したのち、香港・インドを経由してスエズ運河を越えて、イギリス、フランス、オランダ、ベルギーなどを歴訪し、各国の王室や首脳と交遊し、第一次世界大戦の戦禍を視察した。一条実輝の上表文に「殿下、大詔ヲ奉シ、躬ヲ万里ノ波濤ヲ冒シ、刼余ノ山河ヲ歴訪シ、以テ忝クモ我カ蒼生ノ為ニ旁ク良謀ヲ求メ給ヘリ」とあり、「殿下聡明日ニ躋リ、万機ヲ撰行シ給フコト、豊聡皇太子、中大兄皇太子ノ故事ノ如キヲ以テ 宗廟 社稷盤石益々牢シ」とあるのはそうした事情を反映している。

また、その冒頭には、「伏シテ惟ルニ、欧洲大戦ヨリ以来、人心震撼、未ダ則アルニ至ラス(中略)是時ニ当リ、仮若一步

ヲ錯ラムカ、社稷ノ興衰、生靈ノ禍福、将ニ此ニ由テ岐レントス」と述べられている。日本は第一次世界大戦（一九一四—一八）を経て、物価の高騰、農村の崩壊、戦後不況といった混乱の最中にあつた。こうした国内外の社会情勢に対処すべく、摂政宮裕仁の政道の参考となるよう献上されたのが、中大兄皇子が学んだという南淵請安にまつわる一書であつた。一条実輝は『南淵書』の出現を「摩^モ西^{セイ}ノ書石室ニ出テ、西教大ニ起レリ」という一大発見に擬え、聖帝出現を告げる「鳳鳥ノ来儀」の慶事にあたるとして、裕仁親王の「大作」（大いなる御事業）の「初年ヲ奉祝」するために、本書を捧呈するに至つたとしている。しかし、新出の文献がそのような価値を有するものとして信用を得るためには、その由緒が明らかにされなければならない。「西偏東鄙各、一本ヲ獲、対観合攷、稍ヤ読ム可キヲ致セリ」（上表文）とある『南淵書』の伝本のうち、一本は久留米の権藤家に代々伝えられてきたもので、他の一本は奥州の仙台に伝来してきたものだといふ。仙台は校訂に携わつた小澤打魚の生まれ故郷である。権藤が黒竜会の会誌等の文筆を担当していた時分、奇しくも同じ黒竜会の文筆部門を担っていたのが小澤であつた。^(註)『南淵書』の由緒を説明する際、権藤にとつては、壬申の乱のあと廃棄されたとも目されていた南淵請安由来の書物がど

のような経緯で筑後に伝わつたのが問題になる。ここでは、権藤への取材をもとに書かれた大正十一年七月十二日付『東京朝日新聞』の「政道の秘書を献上す」という見出しの記事をみておきたい。記事にはまず本書の成立について次のようにみえる。

南淵書は当時先生が中大兄皇子に教へたノートの控を先生自ら写したのか或は他の者が写し書きしたものか、未だ分明しないが、大化から弘仁まで二百五十年の間に出来たものである

ここでは請安の著作とみるか否かについては明言を避けている。成立の下限を「弘仁」とするのは下巻の輿書に基づく。『南淵書』の跋文によれば、壬申の乱で大友皇子について斬罪に処せられた右大臣の中臣連金が遺子に伝えたものだという。跋文は信憑性に乏しいことは後述するが、同年五月二十六日付『万朝報』の記事は、跋文の内容を伝えて「其の南淵先生の書かれたものが此書で永久に国宝たるべきである」と伝えている。そして、記事の後半には伝来に関する説明がある。

南淵書は（中略）、政道家の秘書として享保頃まで尊重されて来たが遂に徳川幕府のためにこはされてしまった、爾来私の先祖達は命懸けで保存してきたのである、私の祖父延陵杯は同書の一部を説いた許りで七年も蟄居を命ぜられた、高山彦九郎も私の家に同書を調べに来て切腹した、私は亡父の遺言により此書の考証に九年か、つたが、其真実なる確信を得たので摂政宮殿下に献上した（中略）、尚私の家の外に近頃仙台にも一部出たと云ふ事だ

上表文その他によれば、権藤は仙台にあった伝本を入手して校訂を行ったとしており、話に齟齬がある。右の記事では、「政道家の秘書」たる『南淵書』がなぜ徳川幕府によって「こはされてしまった」のかは分からないし、一七九三年（寛政五）に久留米で自刃した高山彦九郎と本書との関係も不明である。権藤家ではこの書物を代々守り続け、祖父の延陵を経て、亡父松門の遺命により成卿が考証に着手したという。なお、記事中の省略した箇所には、元来本書を所持していたのは中臣鎌足の「正系」であったが、一条実輝の祖先にあたる兼良の時代に応仁の兵火で散逸したという経緯が述べられている。

権藤成卿は「南淵書がどうして私の家に伝はつたか」¹³におい

て、本書と権藤家の接点を開ヶ原の合戦後の事情に求めている。すなわち、権藤家は本来日向を本貫とする一族であったが、一六〇〇年（慶長五）に伊東氏によって滅ぼされ、残された者は筑後の天台宗蓮台院に身を寄せることになった。その頃、蓮台座主のもとに匿われていたのが大中臣友安で、友安は権藤石山に「制度律令」の学問を伝授し、『南淵書』を与えた。本書の奥書にある「正二位休嵩退叟大中臣朝臣友忠」は友安の叔父であり、石山は成卿の先祖にあたるという。なお、慶長五年、日向では伊東祐兵の家臣稲津重政が宮崎城を攻め、城主権藤種盛を討つという出来事があった。

『南淵書』の伝来はおよそ以上のように語られている。重要なのは、南淵請安の思想を伝えるのが『南淵書』であり、それが「制度律令」の継承者たる権藤家に残されていたという点であった。そこに明確な根拠が示されるわけではない。ただその刊行とともに、耳慣れない「制度律令」、あるいは「制度学」という権藤家の家学の継承者を自認することで、権藤は家伝の『南淵書』をはじめて開示できたのである。¹⁵ その一方で「南淵自ら書いたものであるか、南淵の教えを受けた人々が祖述したものであるか、或いはいくらか時代が下つてから、古文獻を集めてまとめたものであるか、その辺はまだ研究の余地がある」

とし、「諸家の見る所にまかせよう」とさへ述べているように⁽¹⁶⁾、彼は文献史料としての価値を客観的に考証するという手法を積極的にとろうとしなかった。権藤の説明には撞着が生じることが、それはさしたる問題ではなかったであろう。

二、『南淵書』の内容と偽書説

『南淵書』は上・中・下巻あわせて五十章で構成される。各章の話は、基本的に「皇子問ヒ曰ク」ではじまる中大兄皇子の下問に対し、「南淵子答ヘテ曰ク」と南淵請安が奉答する形式をとって展開される。鋤園第一は「社稷ヲ窺竄」する蘇我入鹿に憤る中臣連鎌子が中大兄皇子と出会ひ、ともに「周孔ノ教」学ぶべく「黄卷」を携えて「南淵先生」（南淵子）を訪ねるところからはじまり、全体の序文としての役割をも果たしている。民初第二からが本題となるわけだが、そこに必ずしも孔子の教えがあるわけではない。本書の中で中大兄皇子が学ぼうとし、請安が説いたのは歴史である。とくに朝鮮諸国との外交史が過半に及んでいる。國府種武の整理に基づけば、民初第二より謨制第四までは神武天皇の肇国、西蕃第五より通具第三十三までは日韓關係、有徳第三十四より興産第三十七までは雄略天皇の

政治、反掌第三十八は日韓關係、遣僧第三十九以下は、朝鮮半島の情勢を説きつつも、乙巳の変の伏線をなす。十罪第四十七には「臣聞ク日中スレハ必ス彗シ、刀ヲ操レハ必ス割キ、斧ヲ執レハ必ス伐ル、公子若シ討ヲ行ハント欲シ玉ハ、古ノ人々ヲ行ヒシ者アリ、仲尼是ナリ、殿陛ニ立チ、三日少正卯ヲ誅ス、其レ將タ奚ノ孤疑ヲ要センヤ」とあつて、請安はクーデターを肯定し、人殺しをも教唆する。國府は、「南淵の言ひたいのは結局之」であつて、他の章にみえる日韓交渉の事実穿鑿、人名地名の牽強付会的考証など「雜誌の埋草的役割」に過ぎないと厳しい。

権藤が『南淵書』に込めようとした思想や歴史観があるとすれば、それはどのようなものだったのだろうか。権藤が力説する本書の歴史的価値は、第一にそれが農民の「自治」を基礎においた文献であり、第二に乙巳の変後に行われた「大化令」が本書に記される請安の教えに基づいているという点である⁽¹⁸⁾。前掲した新聞記事「政道の秘書を献上す」はそれを分かりやすく示している。

記事において、権藤はまず『南淵書』を「社稷」を本位とする「政道の經典」と位置付けている。「社稷」本位の政道とは「民本主義」にあたることも述べている。「社稷」は権藤の思想を理

解するキーワードである。本来は土地の神、穀物の神を意味する言葉だが、権藤はこれを「国民の衣食住」、あるいは「民生」という言葉に置きかえて用いている。それは人々の自然自治の姿であり、その上に政治が行われる農本自治主義こそが日本古来の「国体」であったとみる。「社稷」があつてはじめて国家が存在するのであり、その逆ではないというのが彼の歴史観である。⁽²⁰⁾ こうした社稷観は『南淵書』民初第二にもみえる。すなわち、南淵子は「混蒙ノ世、民自然ニシテ治マル」と説き、神武天皇以前に人々の自然自治があつたとする。

記事には大化改新が請安の「経世の教へ」を受けて成就したこと、「大化令」は農民以外の耕地所有を許さないなど国民を基礎とした律令であり、大宝令が官僚組織の経典であつたのに対して、「自治」を唱道するものであつたことが述べられている。権藤が独特の持論を展開する「大化令」とは、六四六（大化）二月の改新詔、もしくは六六八年（天智天皇七）の制定が伝えられる内容不明の令二十二巻であろう。また、本書は高句麗・百濟・日本の諸民族が「出雲民族」を先祖に持つことを伝えるもので、「世界一民」を説くという。神話史学・言語学の経典にして「羅馬法に匹敵」する価値を有するとさえ主張している。

権藤と『南淵書』がアカデミズムと接点を持つたとすれば、

請安が写し取つたという「永楽大王ノ碑」、すなわち広開土王碑の全文を載せて、考証・註解を付したことである⁽²¹⁾（貢博第二十四・探篋第二十五ほか）。広開土王碑の拓本は陸軍参謀本部の酒匂景信が一八八三年に入手し、その翌年をはじめ日本にもたらされた。しかし、高句麗が滅びたのち、碑石が長らく土中に埋もれていたこともあり、判読困難な文字も多かった。高句麗滅亡以前の七世紀前半に請安が将来したという『南淵書』中の碑文の写しは、それを補完する史料となり得るものであつた。それゆえ、本書に信をおき、その内容を「弁護」する碑文研究も行われた⁽²²⁾。

だが、『南淵書』偽書説の発端となつたのも書中に引用された広開土王碑文であつた。同書・貢博第二十四において請安は次のように語る。

臣昔撰政王ノ令旨ヲ奉シテ西航ス、当時慈師ニ法興ニ謁シ、其永楽大王ノ碑ヲ説クヲ聞キ、路ヲ枉ケテ之ヲ高麗ノ旧都ニ訪ヘリ、碑ノ高二丈、南面聳立、四周字ヲ刻ス、通計壹千七百五十九字、往々苔蝕シテ読ミ難キ者アリ、古樸撫ス可シ、臣其下ニ低徊シ、細ニ其文ヲ抄写シ、其意ヲ詎ヒ、乃チ知ル永楽大王ノ初メ、高麗未タ我ト和セス、居然トシ

テ相持シ、我一大頸敵タリシコトヲ

高句麗僧の慈師（惠慈）から「永樂大王ノ碑」の話聞いた請安は、遣隋使として渡航した際、わざわざ高句麗の旧都を訪れて、高さ二丈、六メートルも達する碑石を見上げながら、四面に刻まれた一七五九字を写し取ったという。探篋第二十五では、私蔵の「古碑ノ文」を篋より取り出し、全文を中大兄皇子に説き示している。

問題は、東京帝国大学の国史学科生が黒板勝美に対して、同書中の広開土王碑文の信憑性について質問したことにはじまる。『東京日日新聞』は一九三三（昭和八）二月十一日付で『南淵書』の偽書疑惑を報じ、翌日、「信用は出来ぬ」という見出しで黒板の談話を載せた。黒板は、請安が鴨緑江上流の輯安県にあった高句麗の都を訪れたことは、当時の交通路その他から考えて到底ありえない、奥書の寛文五年（一六六五）と請安の時代は一千年の隔たりがあり、書中の碑文は現代の学界においては十分信用できるものではないとした。記事は『南淵書』について、「君民共治を高調してゐるもので権藤成卿氏によれば我が国古来の政治の根本はこの点にあるといはれるものである」と補足する。社会を震撼させた前年の血盟団事件、五・

一五事件への関与を疑われた権藤の、思想の根幹に『南淵書』は存在する。偽書説が文献の信憑性を論うだけの問題ではなかったことは明白であろう。

その後、議論は『歴史公論』の誌上に移された²³。同誌は同じ年の四月刊行の誌面（第二編第四号）に権藤成卿への取材をもとにした「南淵書がどうして私の家に伝はつたか」を掲載し、翌月号の誌面（第二編第五号）で特集「問題の南淵書批判」を組み、松岡静雄「南淵書に関する管見」、竹内栄喜「好太王碑と南淵書」、中島利一郎「南淵書は偽書也」の三つの論文を掲載した。

そこで指摘されたのは、第一に広開土王碑文の総字数の誤りである。『南淵書』は碑文の総字数を一七五九字とする。しかも、その註解には「按高句麗古碑、世亦伝其模本。然欠字極多、幾不可説。此書不缺一字、可謂希世珍」と述べられている。この総字数は、酒匂景信によつて初めて日本に将来された碑文拓本の調査結果に符合する。その後、菅政友は「高麗好太王碑銘考」において一七六三字と数えているが大きな差はない。ところが、一九一三年（大正二）に黒板勝美も参加して行った朝鮮総督府古蹟調査委員の原碑調査の結果、それまで碑石第三面第一行と考えられていた行の前に、さらに一行、四十一字が存在する。こ

とが判明する。十三行とされていた第三面の行数も実は十四行であったことが確認され、碑文全体の検証により総字数は一八〇二字に達することが明らかに²³⁾なっていた。『南淵書』の碑文は「一字ヲ欠カス」としながら、実際には第三面の一行四十一字を完全に欠き、しかも研究が不十分であった明治期の水準に基づいて書かれた公算が高まったのである。

なお、竹内栄喜は自身の調査経緯をふまえて、高さ二丈の陵碑に「漢隸奇古」の字体で刻まれた全文を抄録するのは絶対不可能であるとし、あわせて『南淵書』の著者が日本の見地から欠字を補っていることを指摘している。後者に関しては、葛城末治も「現存する碑文の文字で明瞭なもの、他に推論を挟む余地のない文字までも別字を宛てているものが、十余字ある」としている²⁴⁾。つまり、請安が写し取った碑文には改さんの痕跡がある。中塚明がその好例として挙げるのは、第三面第四行目から第六行目にかかる永楽十七年(四〇七)条である。

十七年丁未、歩騎五万ヲ遣ハシ倭ヲ掃尽セシム、倭還タ平
 穰ヲ侵ス、王師之卜戦ヲ合ス、斬殺盡尽、穰ル所ノ鎧鉀
 一万余領、軍資器械稱テ数フ可カラス、還タ沙溝城婁城ヲ
 破ル、王倭ノ屈セサルヲ知り、遂ニ和ヲ議シ師ヲ引テ城ニ

還ル(探篋第二十五より)

最後の一節は、本文に「還破沙溝城婁城、王知倭不屈、遂議和引師旋城」とある。だが、碑文拓本を見ても「王」以下の文字はほとんど判読できない。『南淵書』はそこに文字を当て込み、「広開土王は倭が降服しないことを知り、和議を申し入れて兵を引いた」という内容に仕立てた。権藤はこれに「按スルニ此一節、我国史上重大ナル関係アリ」と注記している。碑文中の倭軍は広開土王の親征の前に敗滅、敗走する存在として登場するから、右のように刻されていたとすれば、たしかに高句麗との関係において大きな出来事というべきかもしれない。しかし拓本研究に接してみなければ、改さんの有無や意図は分からな²⁵⁾い。言語学者の松岡静男にあつては『南淵書』を古代の書物とみなし、捏造された四〇七年の出来事を「此は日韓両国の史書に漏れて居るが、一大重要な史実といはねばならぬ」と評価している。

第二に指摘されたのは、跋文・奥書の誤りである。松岡静雄は奥書に「弘仁六年八月下浣 従五位下丹後守大中臣朝臣弟守」
 「寛文五年乙巳冬 正二位休嵩退叟大中臣朝臣友忠写畢」とあることから、本書が九世紀初頭、弘仁年間までに編纂されたと

推定した。大同・弘仁年間に成立した『古語拾遺』や『先代旧事本紀』と同じく、「記紀にもれた旧記が遺失することを惜しん」で編纂された一書であり、書中に『日本書紀』からの引用や『古語拾遺』・『新撰姓氏録』を素材とした内容が認められるのもそのためであろうとした。

これに対して、宮内省編輯局に在職していた中島利一郎は、内容的・形式的に天智天皇時代の書物ではないと判断した。中島は明の徐師曾撰『文体明弁』を引用して、大中臣朝臣善守が跋文を書いた時代、中国にはまだ跋文がなかったことを指摘した。さらに、『日本後紀』卷二十四・弘仁六年八月戊申条に、「従五位下大中臣朝臣弟守」の丹後守任命記事があることから、「善守」とあるべきは「弟守」の誤りであるとし、写本を作成した「正二位」の「大中臣朝臣友忠」についても、「大中臣氏系図」（『諸家知譜拙記』五）に名前がみえるものの、神祇大副となったのち、一六五三年（承応二）に後光明天皇の勅によって流罪となり、従四位下のまま一六六八年（寛文八）正月に卒しており、奥書の官位はこれに一致しないとして、写本は書誌学的に信用に値しないと断じたのである。

このほか書中の語句や引用の問題も指摘された。國府種武「書物の敵」²⁹⁾は、中国に長く留学した請安が同地で学んだ學術・経

論について語ることもないとしつつ、使用される語彙に「演伎」（大業第三三・事大）（虎視第二十八）・「英雄」（議和第三十）・「明党」（七賊第三十五）・「抜一頭地」（興産第三十七）・「箭過高驪也」（反掌第三十八）・「任使」（同上）・「総計」（翹於第四十三）・「青天白日下」（篤敬第四十四）など、後世の典籍からの引用やもしくは後世になって初めて使用された言葉があること、また偽書と目される典籍の引用、「此故」など漢文では使用されない用句の存在を指摘している。

権藤成卿自身、「たゞ幾重にも了解して頂き度いのは歴代の伝写本が両度の洪水の為に水に浸り、扁だけあつて旁はないとか、注か本文かわからんとかそれ等の事はどうも多少の間違がないともかぎらん」³⁰⁾、「千數百年間伝写を重ねたる本書は誤謬錯訛甚しく其上蠹食敗爛の箇所もあり且つ支那朝鮮の史書に參較せねば解釈されぬ処も多く」と述べているように、『南淵書』がかりに権藤家相伝のものであったにせよ、権藤や小澤打魚がそこに大幅に手を加えたことは言うに及ばない。偽書説によって判明した本書の綻びは、彼らの校注作業が実は「史書」を新しく創作していく過程そのものであったこと³¹⁾、しかもそれが史料に対する杜撰な考証に支えられていたことを明らかにしたのである。

三、『南淵書』と朝鮮

すでに述べたように、『南淵書』は多くを朝鮮と日本の歴史的關係に割いている。その意味では権藤なりの東アジア史論とみてよい。ただそこに見るべきものはない。例えば、釈文第二十六は「永樂大王ノ碑」の文意を中大兄皇子に説く。

首メハ高驪王統ノ出ツル所ヲ叙セシナリ、始祖鄒牟王、一
 二仲牟二作り、又タ朱蒙二作り、東明二作り、漢人或ハ夷
 明二作り、我都慕二作ル、臣謂ラク皆出雲ノ転訛ナリ、素
 王出雲ヨリ此地ニ降ル、故ニ其地ノ王者名号襲ヒ此稱アル
 ナリ

碑文にある高句麗の始祖「鄒牟王」は、別に朱蒙・東明王の名があり、また「都慕」とも記される。南淵子はこれを「出雲」の転訛であり、それは「素王」（素戔嗚尊）が出雲より高句麗の地に降り立ったことに由来するという。

南淵請安が留学した中国よりも朝鮮の歴史を説くのは、唐から帰国する際、百濟・新羅を経由して「彼ノ国情」を見聞した

ことによる。請安はそのように仮構されて、中大兄皇子の下問に答えている。朝鮮關係の叙述は、三韓と倭の交渉のはじまり、三韓の勃興、肅慎と三韓の關係、天日槍の到来、任那官家、神功皇后の親征、高句麗の朝貢、永樂大王の碑文、三韓における仏法の伝来など多岐に及び、そのなかには、十三世紀末、高麗時代に編纂された『三国遺事』に初見する檀君神話に関する記述も含まれる。

しかし、そこには権藤らの朝鮮認識の反映とみるべき、侮蔑に満ちた内容も散見する。例えば、西蕃第五には、中大兄皇子が「往昔三韓ハ我西蕃ナリ、今ニ畔服常ナラスト雖モ、其形勢我ト輔車唇齒ヲ成シ、前王ヨリ呂来心ヲ勞シ玉フ所ナリ」として意見を求めたのに対し、南淵子は、

臣カ愚見ヲ以テスレハ、三韓ノ君民、驕リ易ク怨ミ易ク、
 又利ヲ好ミ詐謀多シ、蓋シ其国、古ヨリ種姓雜居、文アリ
 野アリ、統属一ナラス、故ヲ以テ部属相嫉惡シ、親疎疎相
 攻奪シ、利ヲ見テ合シ害ヲ虞リテ離ル、習性馴致スル所、
 詭譎自ラ賢トシ、厚顔無恥、一朝一夕ノ故ニアラサルナリ、
 是ヲ以テ恩ヲ用フレハ則チ狂レ、威ヲ用フレハ則チ懟ム、
 其我ニ憚服スル所以ノ者ハ、先皇ノ威靈未タキサルニ之レ

由ル而已

と答える。朝鮮諸族が統一をみなかつた理由を人々の性質に求める。護国第十一は、新羅の王子であった天日槍を話題とするが、中大兄皇子が下問に際して次のように語る。

韓人我ト本ヲ同シウス、唯タ其地一衣帯水ノ外ニ在ルヲ以テ、我ハ常ニ彼ヲ侮蔑シ、彼亦タ常ニ我を嫌猜ス、両情和セス睥睨相ヒ視、動モスレバ則チ疎隔ヲ生ス

また、反掌三十八は、永樂大王の治下に和議を交わしたはずの高句麗が、雄略天皇の時代になって大軍を發して百濟を攻めた理由を尋ねた皇子に対し、南淵子が「三韓諸邦盟ニ背クコト、掌ヲ反スカ如キハ、独リ高驪ヲ爾リト為スノミナラサルナリ」として、五世紀代の高句麗・百濟との関係史を説き、「之ヲ総フルニ、我ハ三韓ヲ待ツニ常ニ仁ト使トヲ用ヒ、三韓我ヲ待ツニ偏ニ權ト詐トヲ弄セリ」と話を閉じる。ここにいう「權」と「詐」は人を欺き騙すことを意味する。

権藤成卿が朝鮮とも深い関わりを持つ人物であったことは、すでに滝沢誠の研究に明らかである。滝沢によれば、彼は

一八九〇年代、旧友の武田範之が李周会らと計画した金鰲島共同漁業事業に出資して家産を失い、関妃殺害事件（一八九五年）に関与した武田の依頼で共謀者の千葉子諒の身柄を預かるなどしている。東京に活動拠点を移して黒龍会に参加すると、東学勢力を母体とする韓国の一進会と手を組み、日韓両国対等の合併を標榜する日韓合邦運動に携わった。

右の運動との関わりから朝鮮に渡航し、朝鮮統監府にも出入りしていたとみられ、一九〇六年（明治三十九）四月には京城南山の老人亭で、任命間もない初代統監伊藤博文を交えて開かれた朝鮮の両班との交遊会に臨席している。その後は東京に戻り、合法運動の論策面を担ったという。一九〇七年六月のオランダで開催された第二回平和会議に大韓帝国皇帝の高宗が密使を派遣して、第二次日韓協約廃棄の付議を求めたハーグ密使事件に際して、一進会は日本勢力による高宗引き下ろし工作に関する上表文「隆熙改元之封事」を提出している。この上表文は権藤の執筆になるといふ。権藤は一進会の東学千年王国の建設構想にも関与した。構想は合邦後、朝鮮民族が間島を中心とした満州地方に進出して、（権藤のいう）社稷中心の農業国家を夢見るものであった。

しかし、韓国併合とともに同会は解散となり、日韓合邦運動

も挫折、黒龍会を率いる内田良平とも関係を絶った。権藤の実弟四郎介は、併合直後より李王職に勤務し、退職後も朝鮮新聞の副社長として京城で暮らし、『李王宮秘史』(一九二六年)・『朝鮮閑題』(一九三二年)を出版しており、権藤は彼を介してその後も朝鮮との関わりを持ち続けたのであろうと滝沢はいう。

権藤によれば、父の遺命により『南淵書』の「校注」に着手したのは刊行の九年前だという。彼が東京に移り住み、黒龍会に参加して間もなくのことであり、それは日韓合邦運動への参画に並行して進められたとみてよい。権藤は黒龍会本部に隣居して、一進会会長の李容九ら朝鮮・中国からの客人とも交流があったことも知られる。『南淵書』に朝鮮への大いなる関心を看取できるのはそのためであろう。しかしながら、そこには朝鮮への蔑視感も存在する。このことをどのように理解すべきであるうか。滝沢は、権藤には「被併合民族たる朝鮮民族に対する贖罪意識」があったと述べている。だが、彼が思想の拠り所とした『南淵書』を見るかぎり、そのような意識をすくい取ることはできない。

むすび

一九三三年一月、権藤成卿は久留米に帰郷し、家伝の『南淵書』を献上したことを一族の墓前に報告しながら落涙した。滝沢はその時に賦された一篇の漢詩を紹介しながら、同書の刊行は自身の思想を表明するためとはいえ、「伝統ある権藤家の家系をふみにじり、先祖の霊をあざむく行為であった」と論じている。⁽³⁵⁾ 偽書疑惑が浮上するなか、同年四月十七日付の『読売新聞』に「『南淵書』裁断」という見出しの小さい記事が載った。記事は「官学派にとつては偽書とされるに拘らず、一条公などは今上陛下東宮におはす時台覧をおす、すめした程の問題の古典」について、版元の大地社が残本すべてを裁断し、絶版することを決定したと伝えている。ただ、学術的な価値はどうである、本書の受容はあった。一九三七年、岡山においては県警警察部保安課長の秋吉敏郎が茨城の愛郷塾から本書を入手し、一〇〇〇部を超える和訳版が県警を中心に配布されているように⁽³⁶⁾、その後も農本主義者や国家改造を構想する人々に読み継がれていたのである。

権藤はその思想の在処を歴史に求めながら、その著作活動を

展開した。とりわけ南淵請安に仮託して作り出した偽書をその拠り所とした。『日本書紀』にわずかな記録しかない請安を、大胆にも大化改新を推進して日本に農本自治をもたらした中大兄皇子の先生として位置づけた。そして、自身の古代史認識とともに、独自の社稷観念に基づく国家観、さらには自身の経験に根ざした朝鮮観をもって、古代における日本と朝鮮の来し方をも請安に語らせた。それが『南淵書』であった。

注

- (1) 一九二二年(大正十一)十一月十日付『読売新聞』朝刊。
 (2) 一九二二年十一月十八日付『朝日新聞』朝刊「新刊紹介」。
 (3) 滝沢誠『権藤成卿覚え書』(滝沢清司発行、一九六八年)九七頁より引用。
 (4) 一九三七年(昭和十二)七月十日付『読売新聞』朝刊。
 (5) 丸山真男『日本政治思想史研究』(東京大学出版会、一九五二年)。
 (6) 滝沢誠『権藤成卿覚え書』(滝沢清司発行、一九六八年)、同『権藤成卿』(紀伊国屋書店、一九七一年)、同『権藤成卿 その人と思ひ』(ベリかん社、一九九六年)など。
 (7) 河野有理『社稷』の日本史 権藤成卿と「偽史」の政治学(『偽史の政治学 新日本政治思想史』第六章、白水社、二〇一六年)。
 (8) 戸坂潤『日本イデオロギー論』(一九三五年、白揚社)。
 (9) 以下本稿では、権藤成卿校注『訓訳南淵書』(一九三二年、大地社)

に拠って『南淵書』のテキストを引用している。

- (10) 辰巳正明「遣唐使と近代日本の漢学復興 南淵請安の顕彰碑をとおりて」(『アジア遊学』第四号、一九九九年)。
 (11) 『権藤成卿著作集』第三卷(黒色戦線社、一九三二年)所収。
 (12) 滝沢誠『権藤成卿』(紀伊国屋書店、一九七一年)。
 (13) 『歴史公論』第二編第四号(一九三三年四月)所収。
 (14) 権藤家への伝来については、『君民共治論』第四章にも「幸いにも南淵書三巻が制度家の秘籍として大中臣家に伝へられ元禄中同家の家娘に依り庶長子の友安と云ふ人の筑後の蓮台僧正の下に隠れ、帰雲翁と称し制度律令の学問を権藤岩山に伝へ南淵書を授与した」と説明されている。成卿によれば、その原テキストは一九二三年(大正十二)九月に発生した関東大震災の時に逸失したという。
 (15) 河野前掲注7論文による。
 (16) 権藤成卿『南淵書がどうして私の家に伝はつたか』(『歴史公論』第二編第四号、一九三三年四月)。
 (17) 國府種武「書物の敵」(台湾愛書会編『愛書』第五輯、一九三六年)。
 (18) 権藤成卿前掲注15論文参照。
 (19) 一九二二年七月十二日付『東京朝日新聞』朝刊。
 (20) 渡辺京二「権藤成卿における社稷と国家 小川哲生編『渡辺京二コレクション』(筑摩書房、二〇一一年)所収。この点について、権藤自身は『日本農政史談』(純真社、一九三二年)のなかで「日本には上古より嘗て国家など云ふ観念は少しもなく、百姓を本とした農民共治の組織が、我国古来よりの国体であり、制度でもあつた」と述べている(渡辺論文より再引用)。
 (21) 大地社版『訓訳南淵書』(一九三二年刊)は、集安に現存する同碑の挿絵とともに、四枚の拓本を掲載している。
 (22) 島田好「高勾麗好太王碑考」上・中・下(『満蒙』一一一一、一九三〇)

- 年十一月、二二二、一九三二年二月、二二一六、同年六月、二二一七、同年七月)。島田の研究については、佐伯有清「研究史 広開土王碑」(吉川弘文館、一九七四年)を参照。
- (23) 一九三〇年代の『南淵書』偽書説については滝沢誠「権藤成卿覚え書・『権藤成卿』(注6参考)、河野有理注7論文、佐伯有清注22書などに詳しい。
- (24) 竹内栄喜「好太王碑と南淵書」(『歴史公論』第二編第五号、一九三三年)。
- (25) 葛城未治「好太王陵碑と南淵書について」(『朝鮮金石攷』国書刊行会、一九七四年、一九三五年初出)。
- (26) 中塚明「近代日本史学史における朝鮮問題—とくに「広開土王陵碑」をめぐる」『思想』第五六一号、一九七一年。
- (27) 松岡静男「南淵書に関する管見」(『歴史公論』第二編第五号、一九三三年)。
- (28) 中島利一郎「南淵書は偽書也」(『歴史公論』第二編第五号、一九三三年)。
- (29) 國府種武前掲注17論文。
- (30) 権藤成卿前掲注16論文。
- (31) 『君民共治論』第四章(『権藤成卿著作集』第三卷、黒色戦線社、一九三二年)。
- (32) 國府種武前掲注17論文参照。
- (33) 以下、滝沢誠「権藤成卿と朝鮮—『問々子詩』を中心に—」(『日本歴史』四四〇号、一九八五年)に拠って整理する。
- (34) 滝沢誠前掲注32論文。
- (35) 滝沢誠「権藤成卿」(紀伊国屋書店、一九七一年)。滝沢によれば、権藤は以下の漢詩を残した。ここにいう「一家の伝」とは『南淵書』をさし、権藤家相伝の一書であったことを示唆している。

誰が吾が書を取って九天に捧す 応に知るべし壁に一家の伝を蔵するを 墳を修して告げんと要す心中の事 索ねて苔壇に愕す涙濺然たり

- (36) 西川宏「岡山と朝鮮—その二〇〇年のきずな—」(日本文教出版、一九八二年)。

〔付記〕 本稿は、二〇一七年度國學院大學国外派遣研究制度による研究成果の一部である。二〇一七年十一月二十二日にベルギー王国カトリック・ルーヴァン大学で開催された同大学文学部日文学科主催「薩摩講座」(Leerstoei Satsuma)における報告(「任那日本府説と植民地支配」Modern Debates about Mimana as an Ancient Japanese Outpost and Colonial Rule over Korea)をもとにその一部を修正し、清稿した。